

2015 年度水煙会セミナー

大岡實の建築について

□日時：2015 年 12 月 16 日（水） 10：30～12：00

□場所 理工学部講義棟 C-301

□講演者

安田徹也氏（H.14 卒、H16.修、H22.博、建築史研究室（旧 1 講座）出身）
建築史家・大岡實の建築（2015 年度日本建築学会著作賞受賞）

服部範二氏

（S.34 卒、建築構造学研究室（旧 4 講座）出身、構造建築家、JIA 名誉会員）

大岡實設計による高山寺本堂耐震改修工事について



建築設計に興味のある人、耐震や構造補強に興味のある人、近代建築に興味のある人、建築史に興味のある人、ぜひ参加聴講して下さい。

*近代建築史の特別講義ですが、受講者以外の聴講を歓迎します。

大岡資料とは？

昭和 62 年に亡くなった故大岡實博士（1900～1987）の旧蔵資料。御遺族から日本民家園に寄贈され、民家園本館が完成した後の平成 6 年以降整理が開始された。現在も整理は続行中。内容は大きく分けて蔵書（大岡文庫）、写真、図面、摺本・拓本、書類、原稿、書簡、私物その他。現在までに蔵書、写真（ネガのみ）、図面、摺本・拓本、書類（一部）、原稿（一部）、の目録が刊行されている。

大岡實の略歴

大岡實の略歴は右に記した通り。

学術の分野では戦前には主に奈良寺院の伽藍配置に関する論文を発表。戦後横浜国立大学に招かれて以降は各地の民家調査を精力的に行い、日本民家園の設立にも関与している。この縁で、大岡實の旧蔵資料が日本民家園に寄贈された。

行政においては国宝保存法（1929 年公布、1950 年に文化財保護法が公布され現在に至る）時代における建造物の文化財指定の責任者で、戦時中の防災計画や法隆寺修理にも主導的役割を果たした。戦後法隆寺国宝保存工事事務所長となるが、失火の責任を問われ辞任。無罪が確定した後に横浜国立大学教授に就任している。

明治 33 年 9 月 29 日	東京市深川区牡丹町にて出生 (現新宿区三栄町)
大正 15 年 3 月	東京帝国大学工学部建築学科卒業
昭和 2 年 4 月	文部省嘱託（古社寺保存計画調査事務担当）
昭和 14 年 1 月	雑誌『建築史』創刊
昭和 15 年 12 月	文部技師任官（宗教局勤務）
昭和 17 年 1 月	工学博士
昭和 21 年 7 月～ 昭和 24 年 3 月	法隆寺国宝保存工事事務所長
昭和 22 年 5 月	国立博物館保存修理課長
昭和 24 年 7 月～ 昭和 27 年 5 月	法隆寺火災事件のため休職
昭和 27 年 6 月	横浜国立大学教授
昭和 29 年 12 月	文化財専門審議会専門委員
昭和 34 年 5 月	平城京跡調査委員会
昭和 41 年 3 月	定年退職
昭和 41 年 4 月	日本大学工学部建築学科教授
昭和 57 年 3 月	退職
昭和 62 年 12 月	逝去

大岡實の新築設計活動

大岡實は戦前にも数棟の建物を設計しているが、本格的に設計活動を開始したのは昭和 24 年 7 月に法隆寺火災の責任を問われて起訴されてからである。それから無罪が確定する昭和 27 年 5 月の間、大岡實は公職から追放されてしまったため、建築家として活動する事になった。設計活動は無罪確定後も続けられ、生涯におよそ 100 棟以上の建物を設計している。

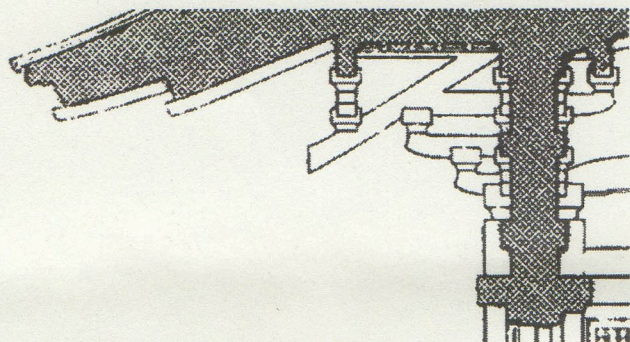
代表的な作品には浅草寺本堂、川崎大師（伽藍全体）、興福寺国宝館、霊友会彌勒山伽藍、中尊寺金色堂新覆堂、増上寺本堂、薬師寺金堂復原（基本設計）、等がある。また大岡實の業績として姫路市名古山仏舎利塔をはじめとする仏舎利塔の設計が挙げられる。

①寺院建築の設計

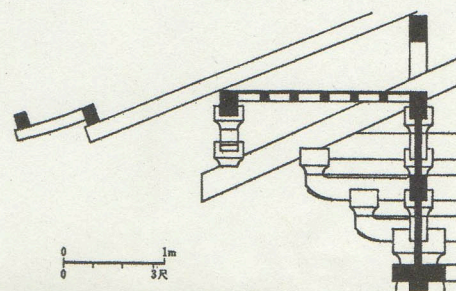
浅草寺本堂（観音堂）（東京都台東区浅草 昭和33年10月竣工）

大岡實が最初に設計する事になったのは、昭和20年3月に戦災により焼失し、戦後復興される事になった浅草寺本堂であった。浅草寺本堂は昭和8年に伊東忠太の指導による修理を行っており、復興に際しても最初は伊東忠太に設計が依頼される予定だったが、当時既に伊東が高齢だった事などから、伊東から大岡に設計が依頼された。

浅草寺本堂については、まず構造を木造にするか鉄筋コンクリートとするかの議論があった。しかし木造とすると柱だけでもケヤキの大材64本が必要となるが、その様な部材を揃える事はもう不可能であった。そのため構造は鉄骨鉄筋コンクリートとされた。規模はほぼ焼失前と同じだが、細部の様式は江戸時代そのままではなく、奈良時代の様式が用いられた。例えば組物は薬師寺東塔^{やくしじとうとう}（730年）を模している。これは大岡が奈良時代の建築を最も高く評価していたからである。

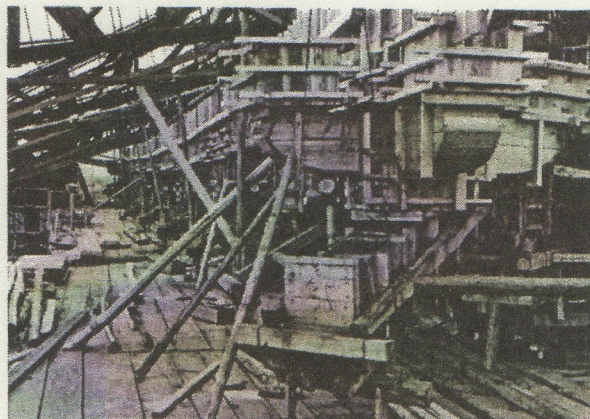
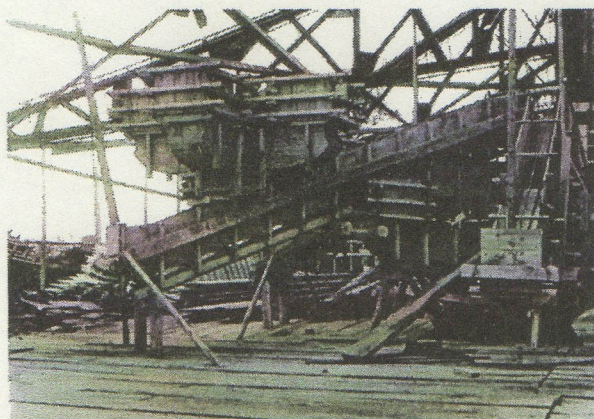


浅草寺本堂の組物

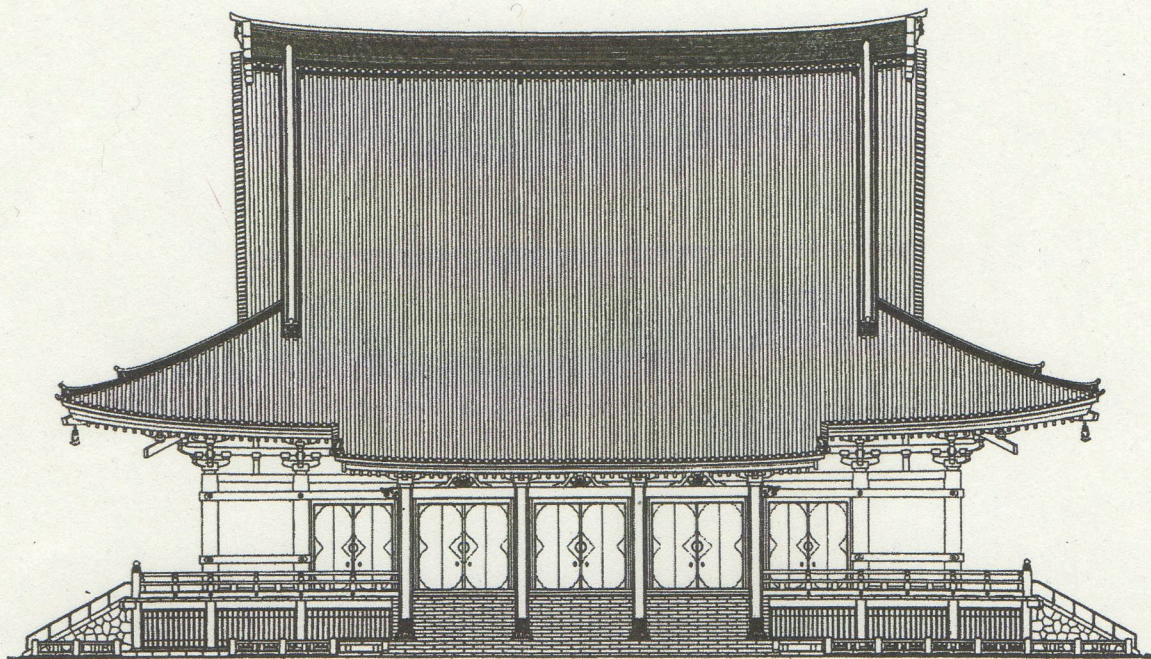


薬師寺東塔の組物

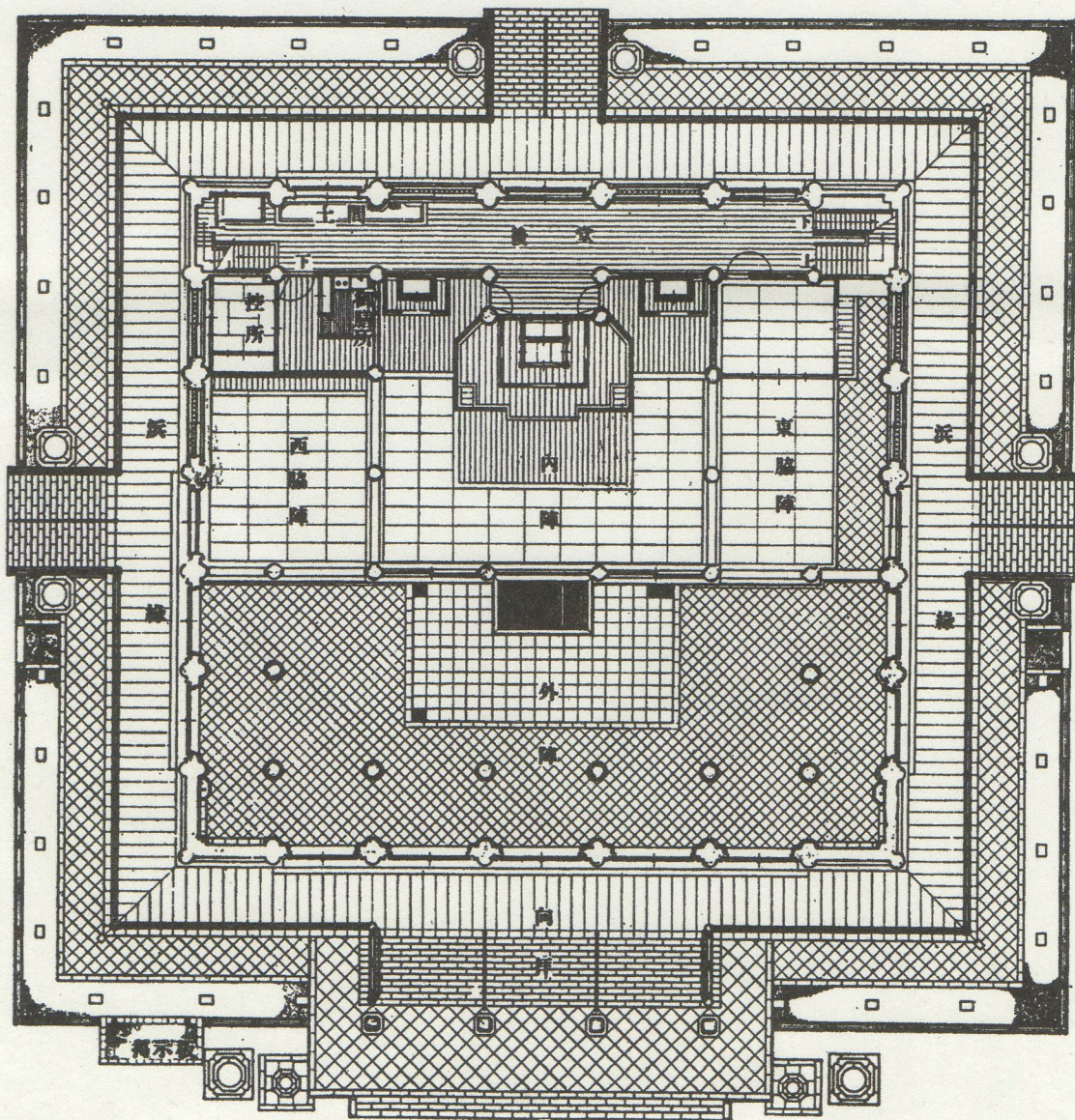
浅草寺本堂では木造の様式をほぼそのままコンクリートで再現したため、細かい部材や尾垂木などの斜めの材ををすべてコンクリートで再現する事になり、技術的に多くの困難が伴った。



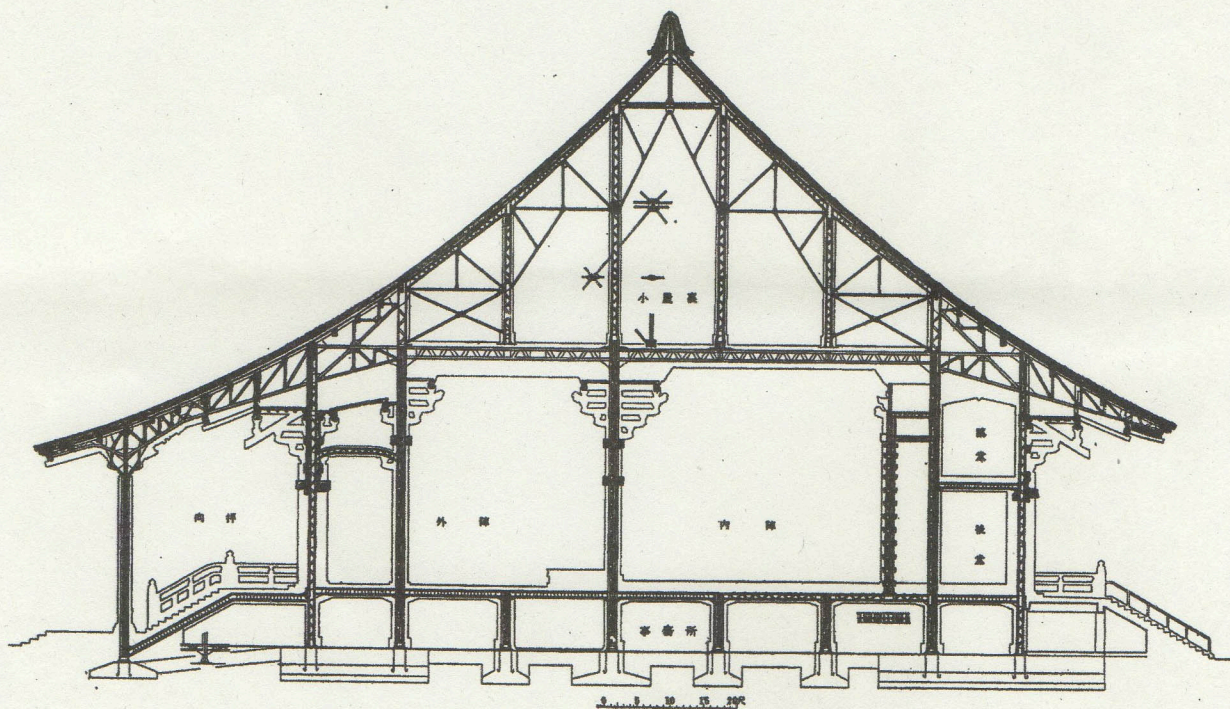
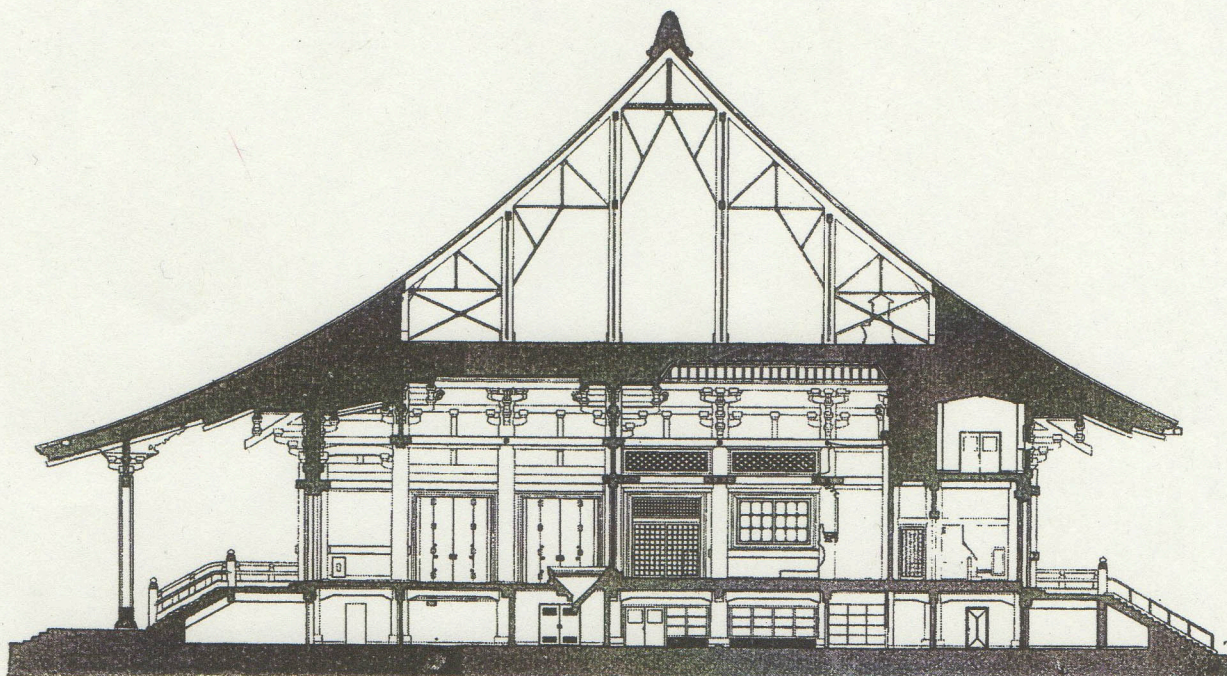
浅草寺本堂工事 [S27.10]



Architectural scale bar



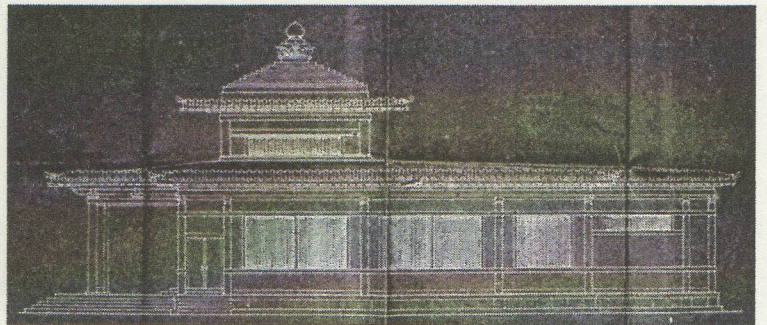
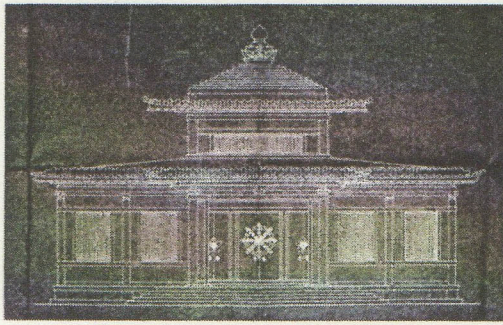
Architectural scale bar



浅草寺本堂竣工図面（『昭和本堂再建誌』（浅草寺 昭和33年10月）より）

光厳寺本堂（富山県富山市五番町 昭和29年11月7日竣工）

大岡實が次に手掛けたのは富山県富山市の光厳寺本堂で、設計は後だが、竣工は浅草寺本堂よりも早く、竣工順で言えばこれが大岡の戦後の処女作となった。これも鉄筋コンクリート造だが、浅草寺とは異なり、近代風なデザインの寺院となった。同傾向の作品として東本願寺浅草霊堂（現存せず）、静岡県沼津市の本能寺本堂がある。



光嚴寺本堂正面図・側面図 [25. 12. 20]

川崎大師本堂 (川崎市川崎区大師町 昭和 39 年 5 月 5 日竣工)

大岡が三番目に設計を手掛けたのが川崎大師本堂である。

1・奥行きのある平面

川崎大師に限らず近世以降の寺院建築は、参拝客を多く入れるため、本堂内の客が入る部分(外陣^{げじん}という)をどんどん広くしていった。そのため建物の奥行きがどんどん長くなった。その極端な例が善光寺である。

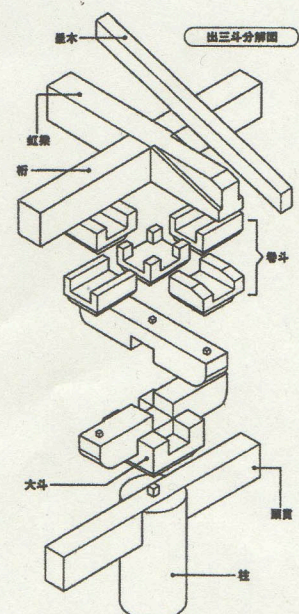
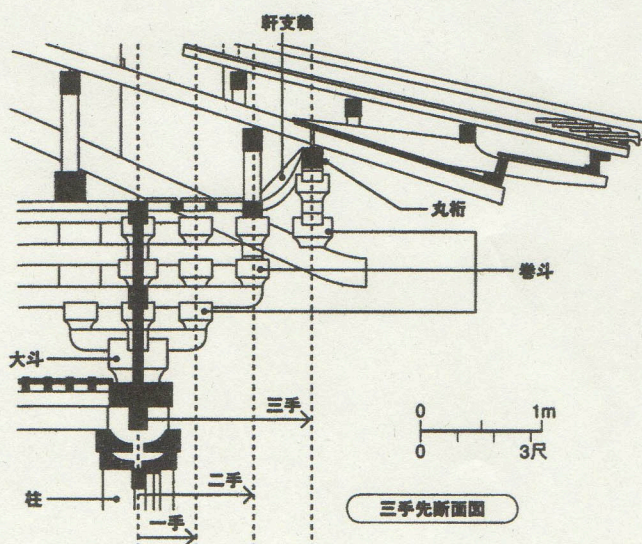
川崎大師本堂も外陣を大きくとろうとして、最初は妻入りの善光寺風のデザインが検討された。実際に後に設計された逗子市の延命寺[S52. 5. 21 竣工]では妻入りのデザインが採用されている。

最終的に川崎大師では、後方の3間を角屋風に突き出す事によって平入り^{ひらい}にした。この処理を検討する為に描かれた多くのスケッチが残っており、大岡實がこの点に苦慮した様子が窺える。

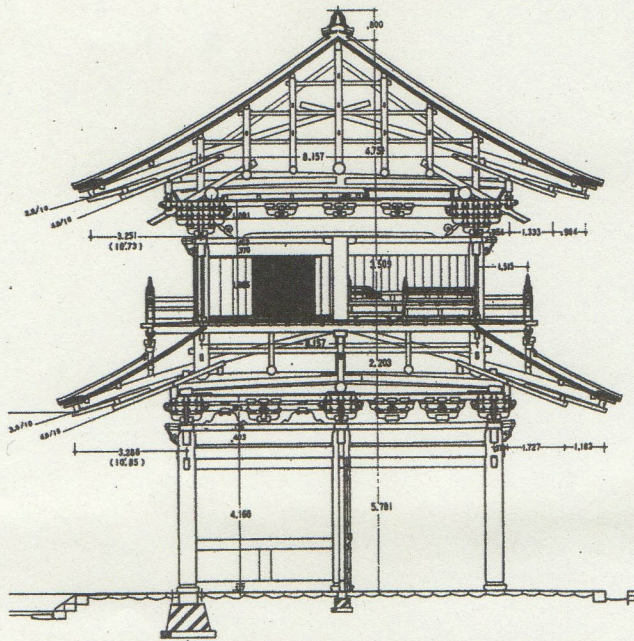
2・大仏様の組物

川崎大師本堂は基本的には伝統的な木造寺院の様式で設計されたが、浅草寺本堂とは異なり、鉄筋コンクリート造ならではの工夫が盛り込まれた。

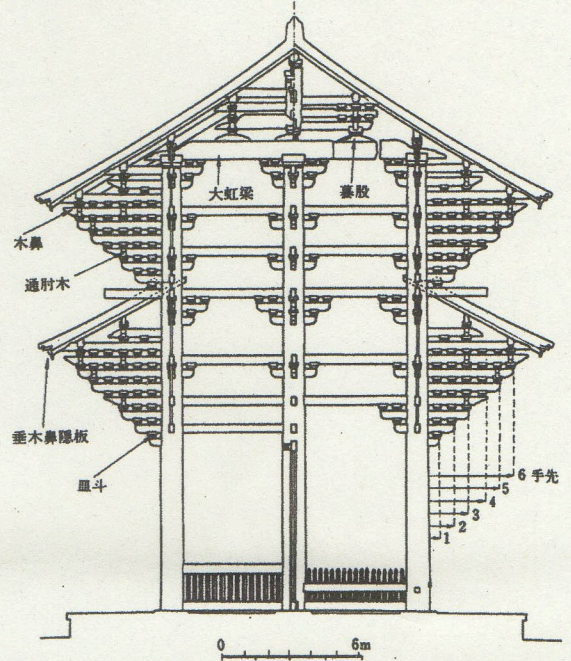
通常の寺院建築では、柱は一階分の長さしか無く、その上に組物^{くみもの}を乗せて、その上に屋根が架かる。つまり柱と屋根が接する部分には必ず組物が入り、これがデザイン上の見せ場になっている。



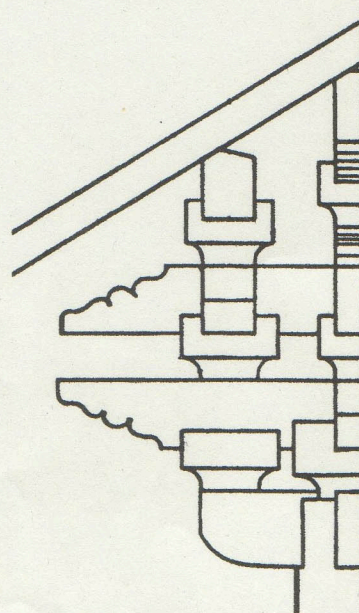
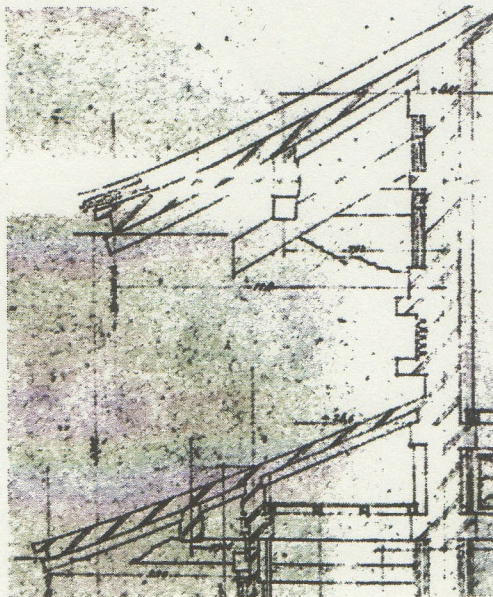
しかし鉄筋コンクリートでは柱・梁・床などが一体となって剛性を発揮するので、柱を直接屋根面まで伸ばさなければならない。そのため組物には構造的な意味が無くなってしまふのだが、デザイン的には是非とも組物が欲しい。そこで大岡が目を付けたのが大仏様である。大仏様とは治承4年(1180)に東大寺が焼失した後、大勸進となって東大寺を復興した重源が開発した様式で、柱を屋根近くまで伸ばし、それに挿肘木を挿して軒を支えるのが特徴である。通常の組物が柱の上に乗っているのに対し、大仏様の組物は柱に横から挿さっている。これを鉄筋コンクリートに応用したのである。また大仏様の細部には「大仏様線形」と呼ばれる特徴的な曲線が用いられるが、これも同時に採用された。



通常の寺院(和様)の例：大徳寺山門



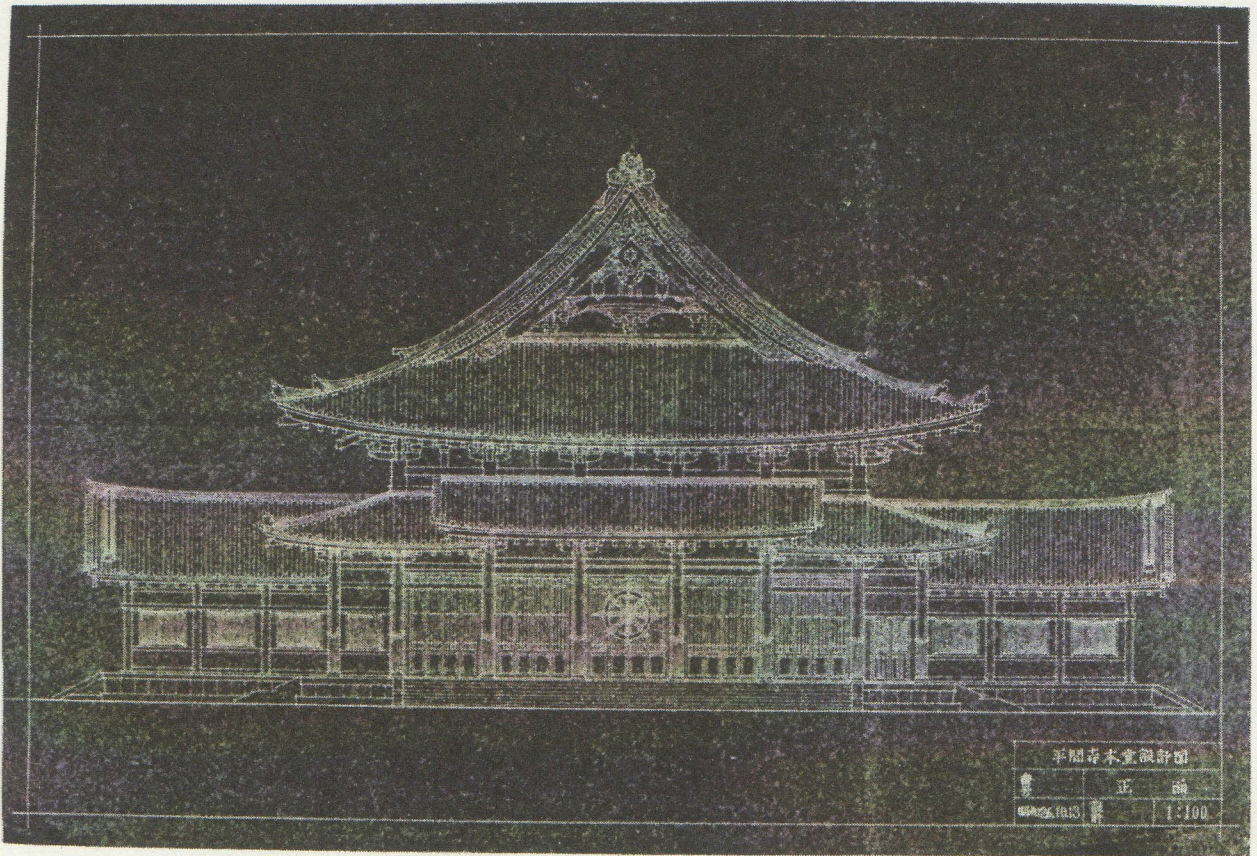
大仏様の例：東大寺南大門



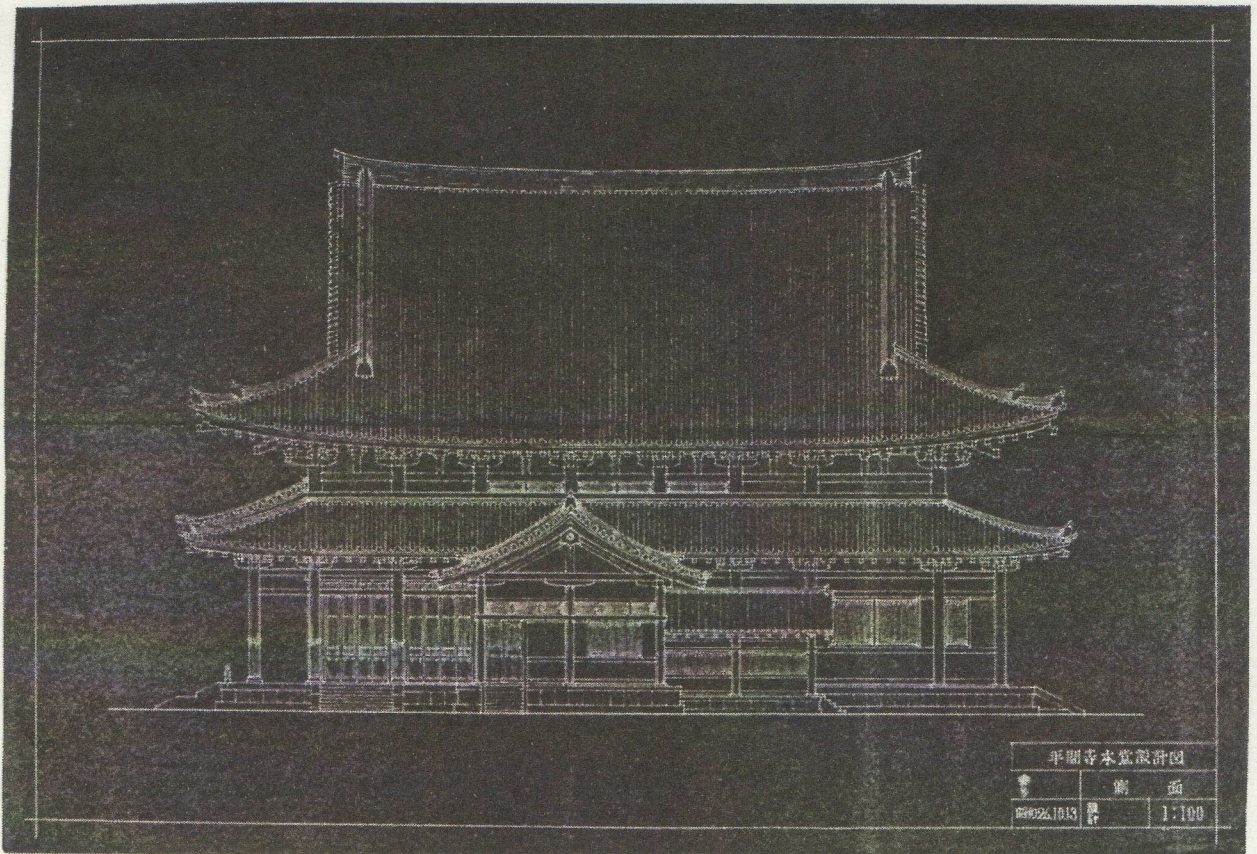
川崎大師本堂の組物
(左)

大仏様線形の例：
東大寺法華堂礼堂
(1199年)
(右)

また、川崎大師本堂は通常よりも垂木を太くしている。これは施工のしやすさと、見た目のバランスを考慮したものである。

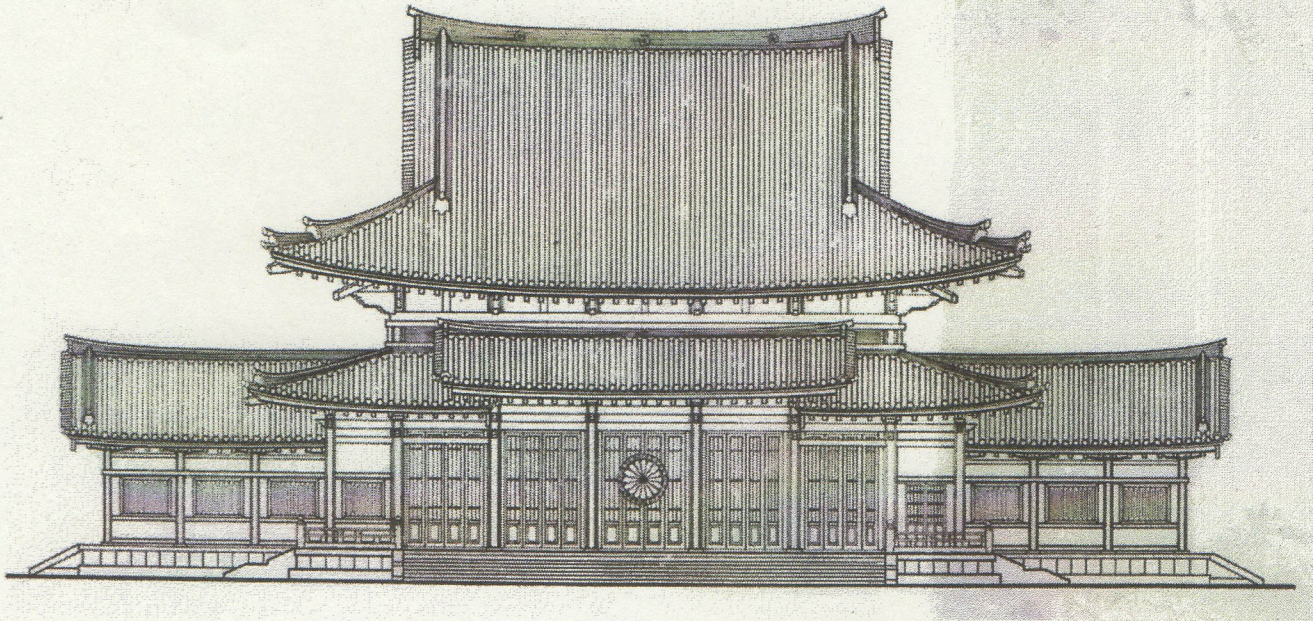


川崎大師本堂設計図正面 [S26. 10. 13]

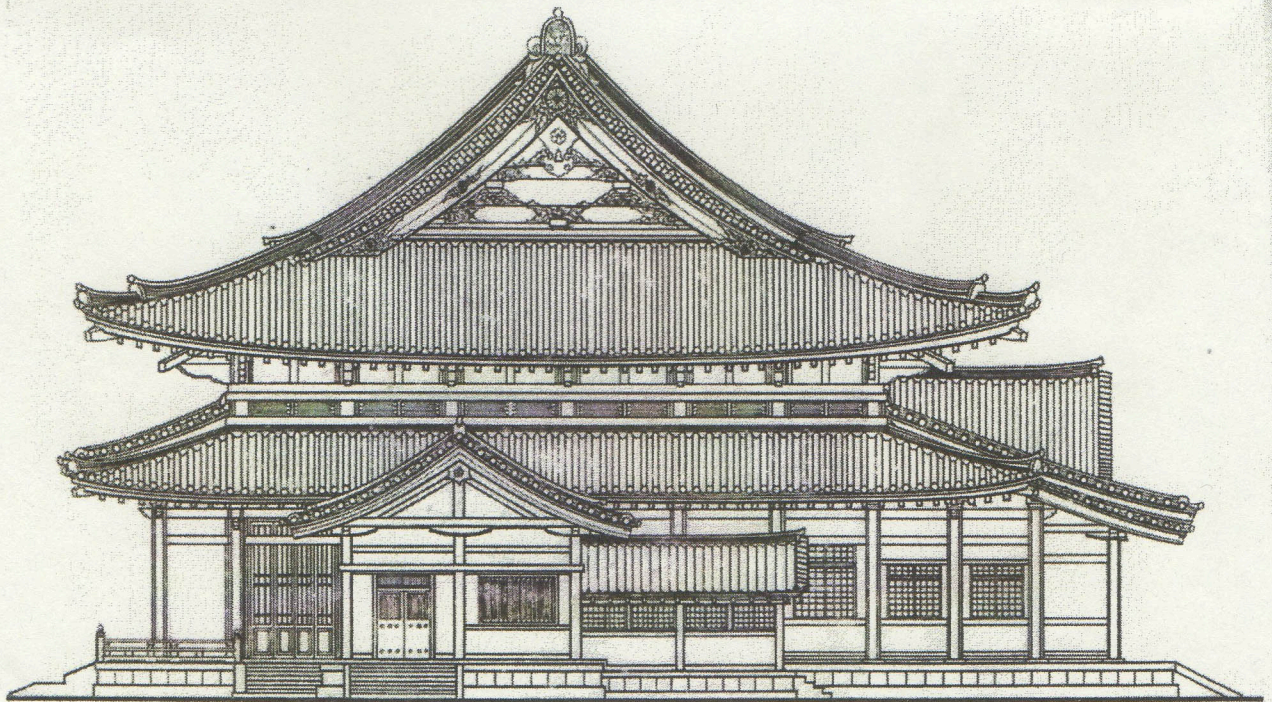


川崎大師本堂設計図側面 [S26. 10. 13]

別格本山平間寺
川崎大師本堂再建設計圖



川崎大師本堂再建設計圖 正面図（実施案）



川崎大師本堂側面図（実施案）

法隆寺金堂の様式

大岡實が設計した作品の中には法隆寺金堂（7世紀末）の様式に影響を受けた物が多く見られる。主な物に医王寺本堂（世田谷区深沢 S38）、聖光寺本堂（長野県茅野市蓼科 S45）、真光寺本堂（横浜市 S46）、法蔵院本堂（横須賀市 S47）等がある。

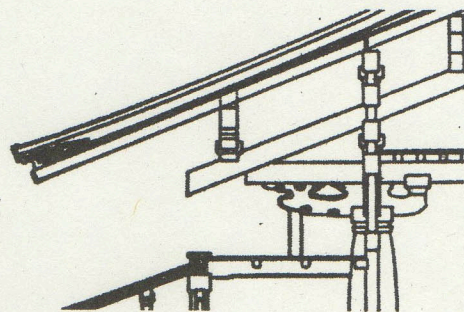
それらの作品には次の様な特徴がある。



法蔵院本堂

1・雲形肘木くもがたひじき

川崎大師本堂で用いられた組物は、結果的に法隆寺金堂の組物に近いものとなった。法隆寺金堂は現存最古の木造建築だが、これには「雲形肘木くもがたひじき」という部材が用いられている。後世の組物がます枅という下部がくびれた四角い部材と肘木ひじきという細長い部材を組上げて作られているのに対し、法隆寺では長大な雲形肘木を差し出して一気に軒を支えている。これは法隆寺金堂・五重塔・中門と、その近くにある法起寺三重塔にしか見られない技法だが、鉄筋コンクリートで組物を作る場合、細かい細工が必要な普通の組物よりも、こちらの方が作りやすい。



2・鋳葺きの屋根しころぶ

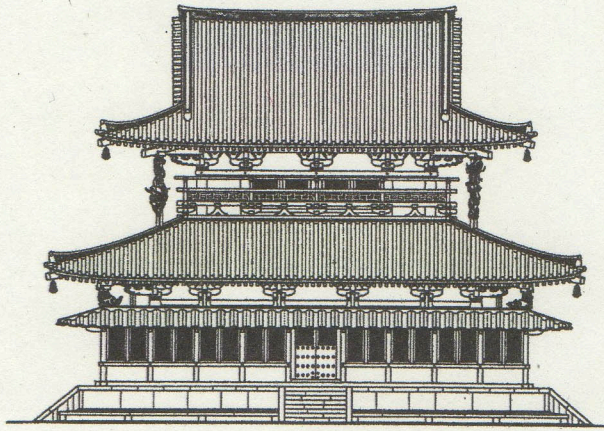
かつて法隆寺金堂は「当初は鋳葺きだった」と考えられていた。鋳葺きとは屋根面が二段になった屋根の事で、現存例は玉虫厨子たまむしのずしだけだが、法隆寺金堂も当初は玉虫厨子と同じ鋳葺きだっただろうと思われていた。しかし昭和 20～29 年に法隆寺金堂が解体修理された際、当初部材の痕跡等から、鋳葺きではなかった事が明らかになった。

しかし、大岡は意匠上の観点から、鋳葺きを高く評価していた。

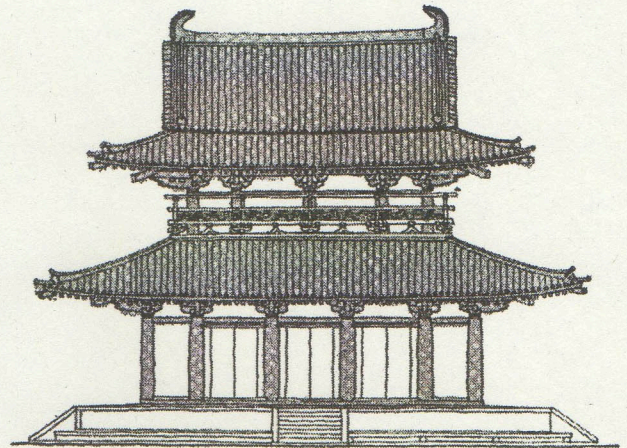
大岡実「増上寺の建築」(『建築東京』vol.12 昭和51年)

入母屋自体の形についても、私は玉虫厨子に見るような、いわゆる鋳葺きの屋根が意匠的に非常に優れていると考えている。鋳葺きの場合、上方の部分は矩勾配(45°)に近く、下方の部分は四寸～五寸の緩い勾配で、その結果は、上方の屋根は屹立性が強く、鋭い感じを持っているが、周囲の勾配のゆるい屋根が、これを受けて、安定感を与えるのに役立っているのであって、極めて巧な意匠であり、今回も鋳葺を採用した。

このため、大岡が書いた『日本の建築』(中央公論美術出版 昭和42年)という本では、当時既に鋳葺きではない事が明らかになっていたにも拘らず、法隆寺金堂の復原図を鋳葺きで描いている(次頁)。そして実作においても鋳葺きを多用した。また棟の両端に鬼瓦しびではなく鴟尾を用いるのも大岡實の作品にしばしば見られる特徴である。



法隆寺金堂正面図（現状）



大岡實による推定復元図

増上寺本堂（東京都港区芝公園 昭和49年11月10日竣工）

大岡實の法隆寺タイプの作品のうち、最大規模の物が増上寺本堂である。

組物は初期のスケッチでは雲形肘木が描かれていたが、実施案では大仏様繰形のついた挿肘木となった。鍔葺きの屋根や全体のプロポーションは法隆寺金堂を意識したものと思われる。

1・単層にするか、重層にするか

設計依頼の当初は寺側も重層（屋根が二段ある）を想定していたが、後に予算の都合から単層（平屋）にする様に大岡に要請した。しかし大岡は立地条件から強く重層を主張し、それが実現した。

大岡実「増上寺の建築」（『建築東京』vol.12 昭和51年）

隣に三十米のプリンスホテルがあり背後に東京タワーを背負った環境で単層にしたのでは、出来上がった本堂が谷間に潜ったようになることは火を見るよりも明らかなので、絶対重層にしなければならないと主張し通した。

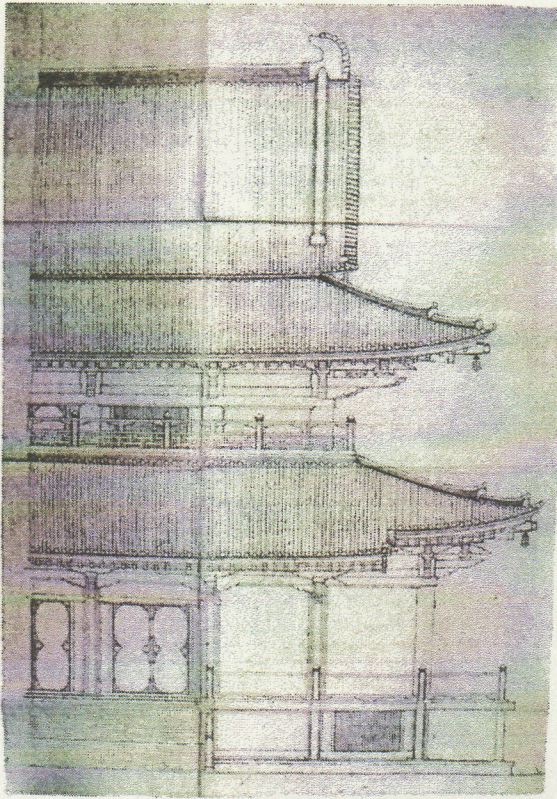
2・全体の形

本堂の平面は法要などの関係からほぼ正方形に決まっていた。そのため、川崎大師本堂同様、奥行きのある平面にどうやって屋根を架けるかが問題となった。普通に入母屋屋根を架けると、妻の三角形の部分が巨大になってしまい、重苦しい感じになってしまう。増上寺本堂では後方の1間を葺き下ろす形にして何とか処理している。

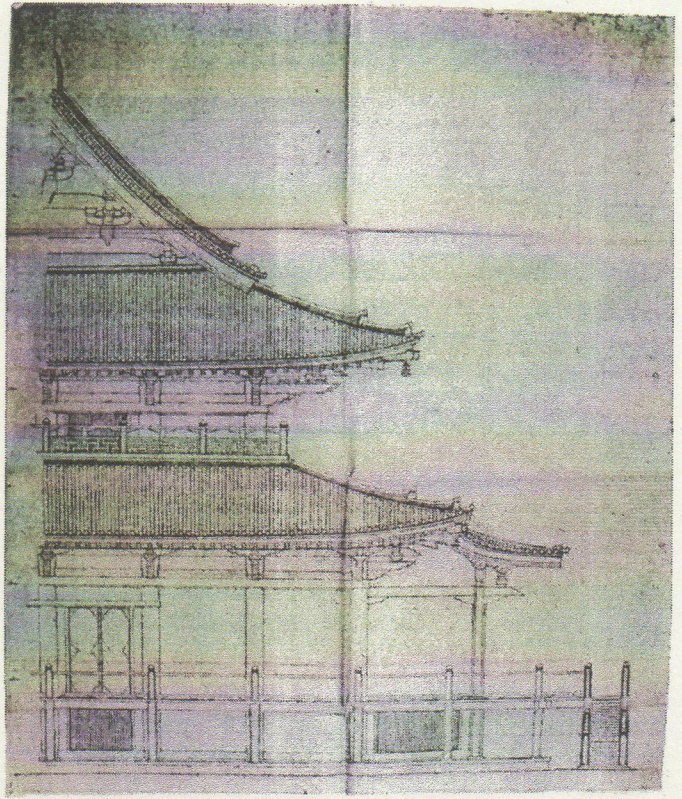
以上の事を検討した多くの設計案が残されており、それらの中には正方形平面に二つの屋根を架けた双堂形式ならびどろのものまである。

3・組物の形

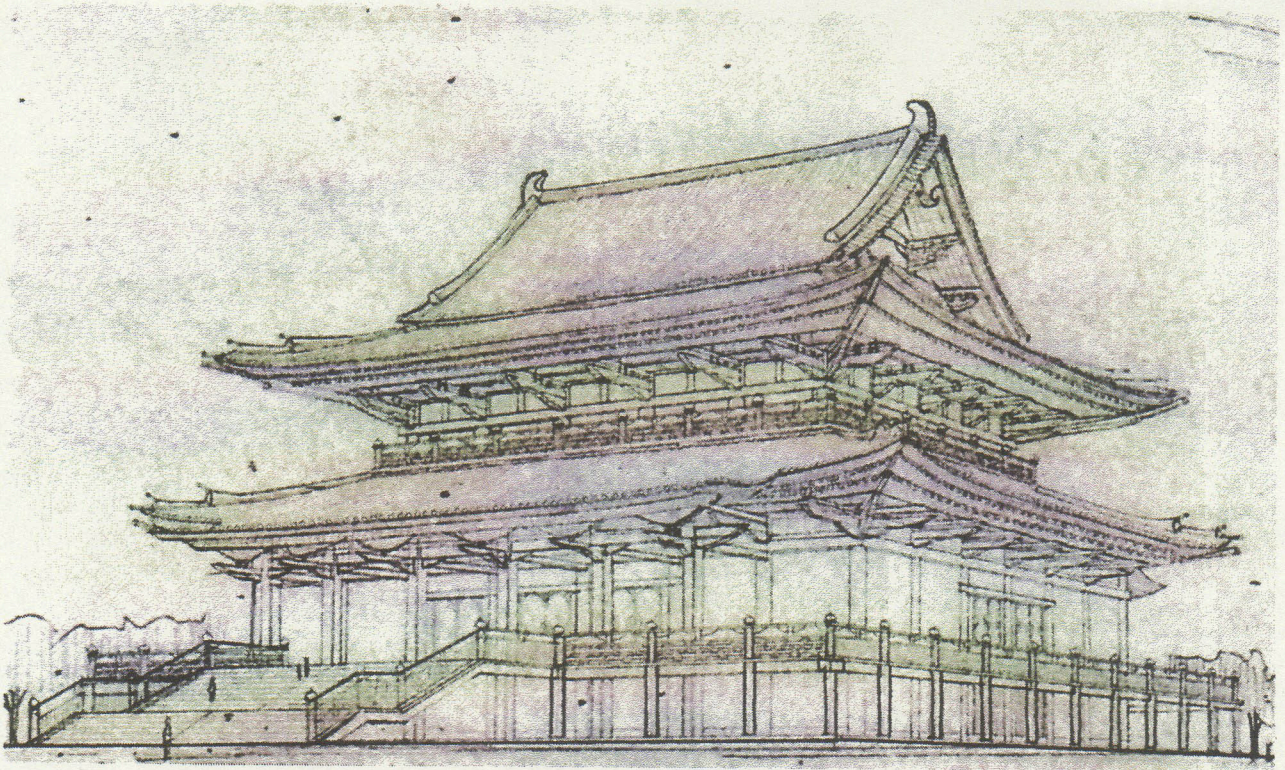
組物は川崎大師と似た、大仏様繰形の付いた挿肘木である。川崎大師と違うのは、通常は斜めになっている尾垂木おたるきという部材が水平になっている点である。これは、鉄筋コンクリートで斜めの材を作るのが、無理ではないが、技術的に難しいためである。



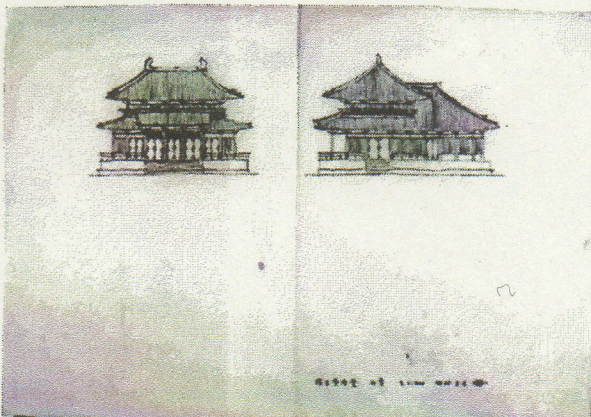
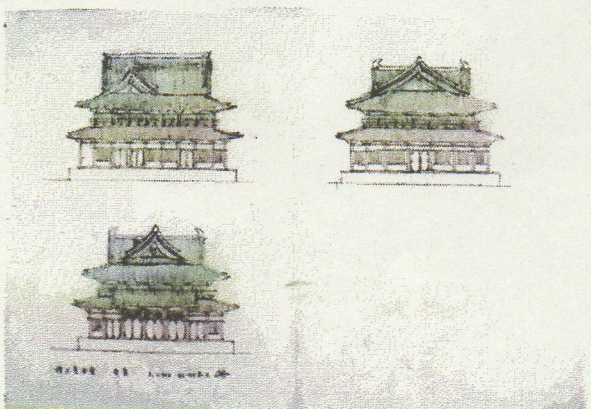
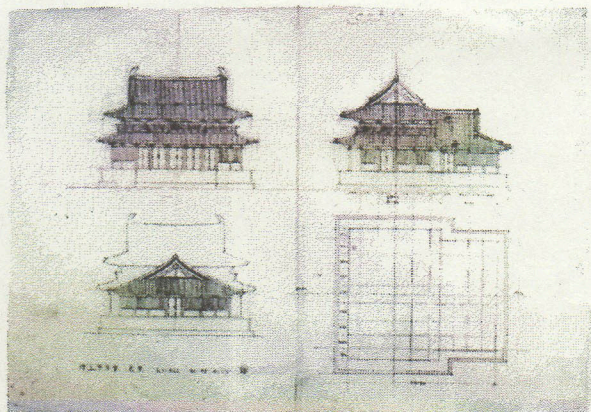
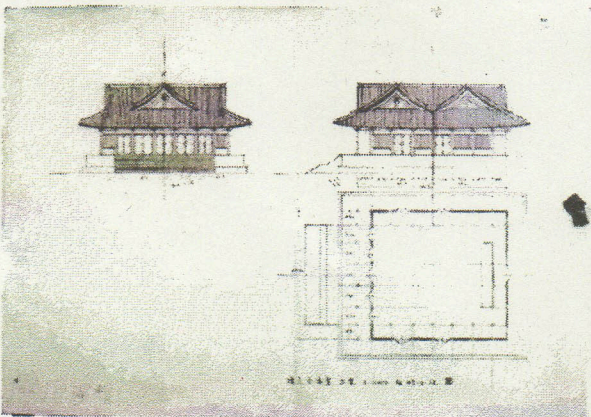
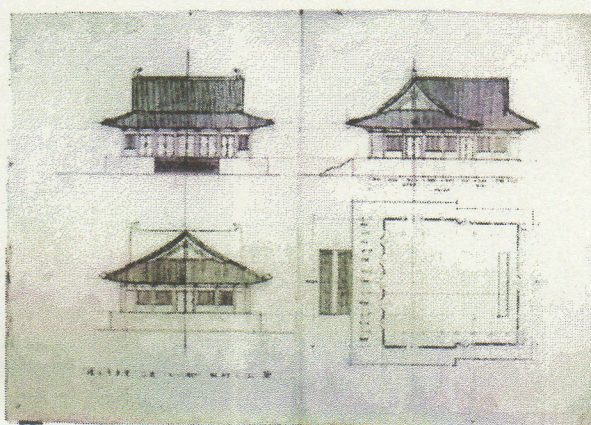
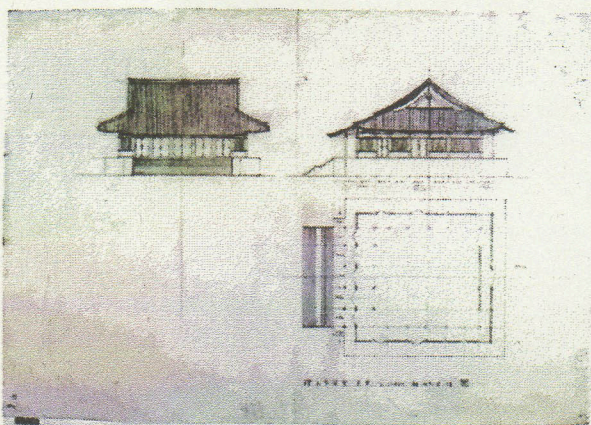
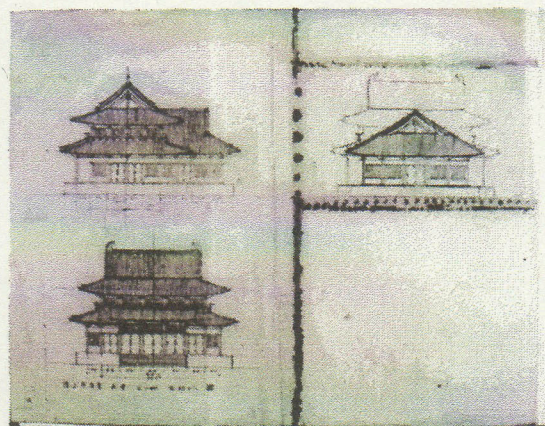
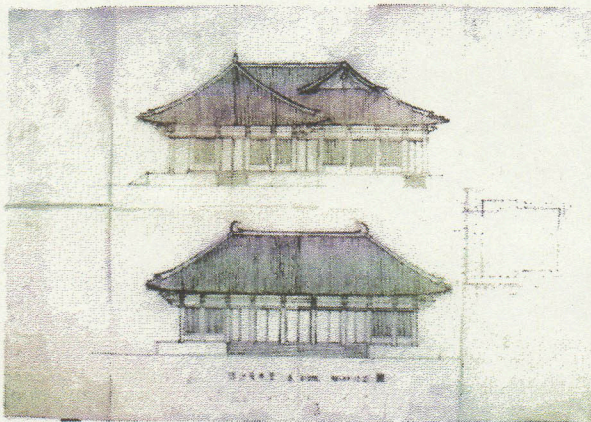
増上寺本堂正面図



増上寺本堂側面図



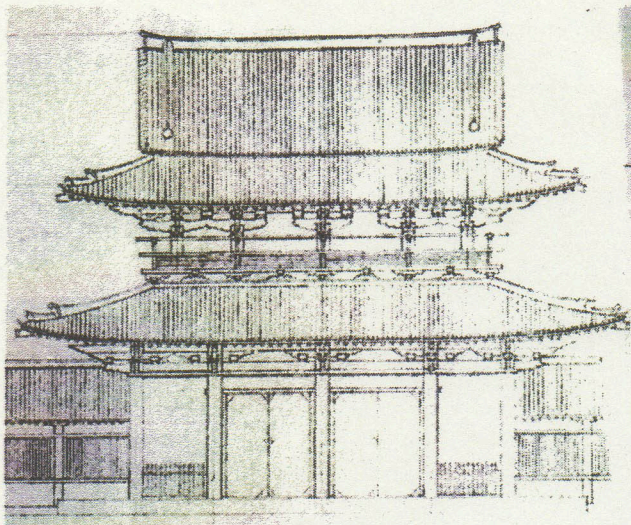
増上寺本堂正側面パース



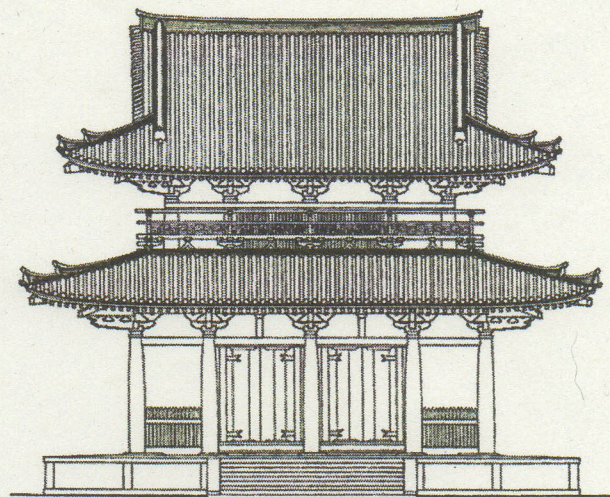
「増上寺本堂 3 1/200」「増上寺本堂 A' 案 1/400」～「同H案 1/400」

川崎大師山門（川崎市川崎区大師町 昭和52年11月2日竣工）

川崎大師山門も、当初は法隆寺の様式、この時は法隆寺中門（7世紀末）^{ちゅうもん}をモチーフとして設計された。屋根は鍔葺きで、組物は大仏様繰形のある挿肘木。当初案は増上寺本堂に近い建物であった。



川崎大師山門案 [S49.3.3]



法隆寺中門

しかし、現地に行って検討しているうちに、大岡はこの当初案に違和感を感じるようになっていった。

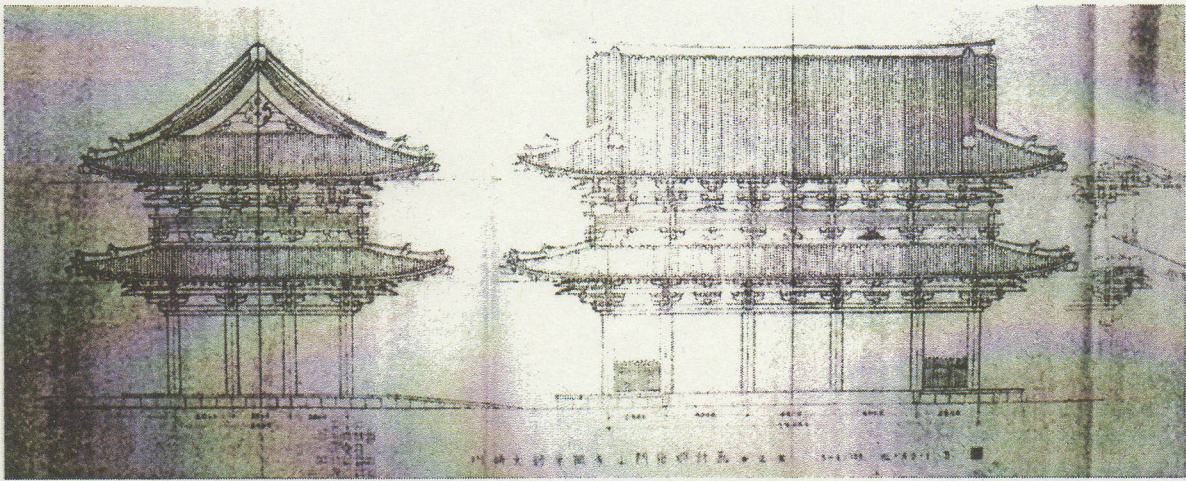
大岡実「山門の建築について」

（『お大師さまとともに 第5集』川崎大師 昭和52年1月）
何度も現地へ行って、自分の設計図によって建ち上がった門の姿を想像してみると、最初に考えたように、法隆寺中門の形が、この場所では、必ずしも最適ではなさそうな気がしてきて、大いに迷った。色々構想を練ってみたが、どうも川崎大師の場合は、非常に奥行きのある深い法隆寺の中門より、比較的横長の門の方が、調和するのではなかろうかと考えるようになった。

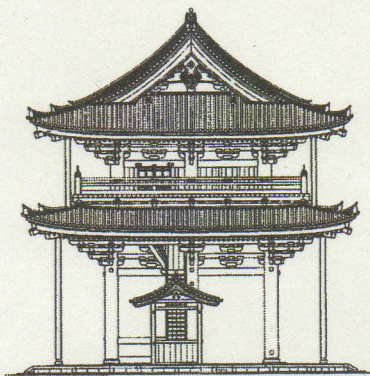
このため当初案を捨てて、新たに京都の東福寺三門（1425年）をモチーフにした案を作成し、これが実施された。結果的に戦災で消失した先代の門の幅とほぼ同じになり、奥行きはやや大きくなった。

また、川崎大師山門では木造の寺院と変わらない本格的な組物が作られた。これは恐らく予算に余裕があったため可能になったものである。

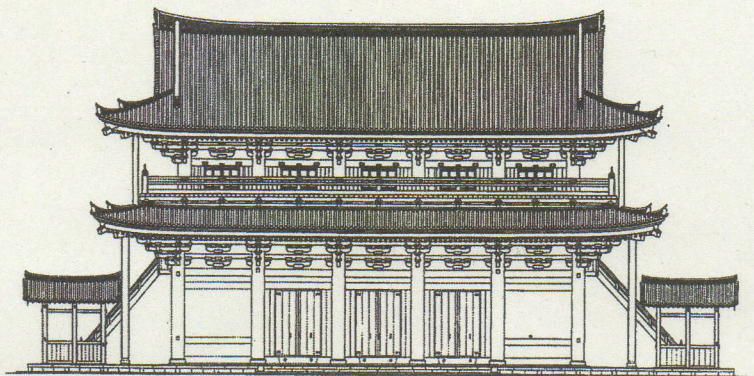
更に高欄（二階の手摺）^{こうらん}も独特のデザインになっている。これは大岡がインドやネパールで見た民家の二階の手摺がモチーフになっている。（「山門の建築について」より）



川崎大師平間寺山門復興計画第2案 立面図 1/100 [S49.11.5]



東福寺三門側面図



東福寺三門正面図

川崎大師八角五重塔（川崎市川崎区大師町 昭和59年3月1日竣工）

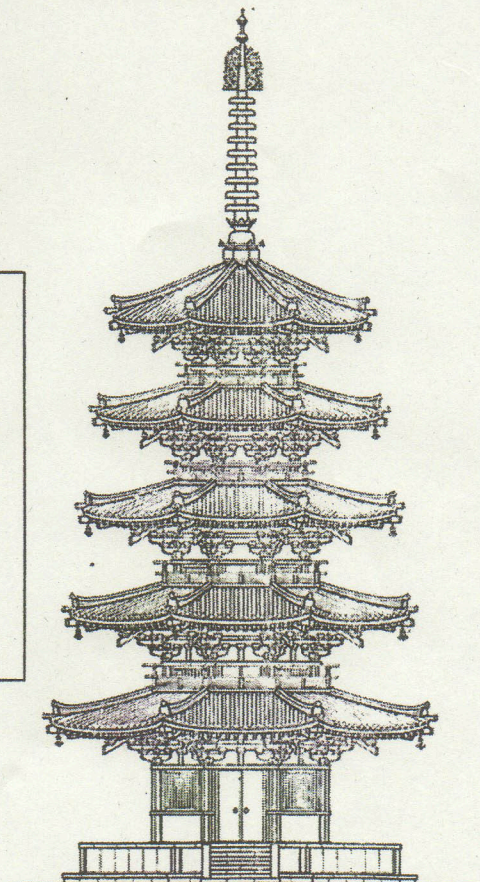
大岡は川崎大師伽藍の重要施設をほぼ全て設計している。本堂〔S39.5.5 竣工〕に始まり、自動車祈祷殿〔S45.11.22 竣工〕、信徒会館〔S48.11.25 竣工〕、山門〔S52.11.2 竣工〕、新客殿金剛閣〔S57.12.25 竣工〕を手がけ、最後に手がけたのが八角五重塔である。

大岡実「川崎大師平間寺八角五重塔に対する説明」

（大岡資料 4-3-11-125）

八角形の建物は四角の建物より、屋根の形が複雑で、形に変化があり、かつ穏やかさを持っている。軒も八方に出るので賑やかさを持っているので華麗な感じがある。かつて伊豆の遠笠山の霊友会の道場の中心建築に八角三重塔を設計したのであるが、姿がよいと好評であった。

これも山門と同じく、鉄骨鉄筋コンクリート造だが、木造と変わらないデザインになっている。



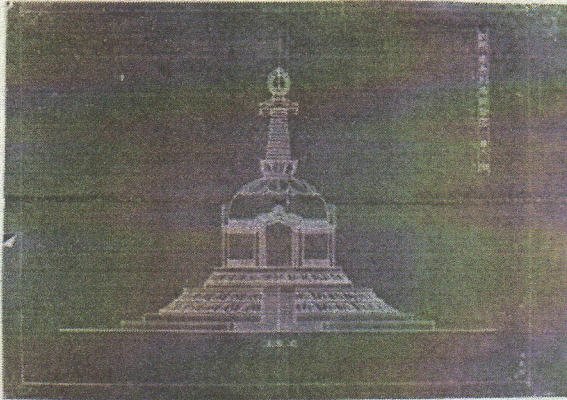
②日本山妙法寺の仏舎利塔、及びインド風寺院建築

大岡實の特異な業績として、多くの仏舎利塔の設計がある。これは日本山妙法寺という日蓮宗系の新興宗教の依頼によるものであった。

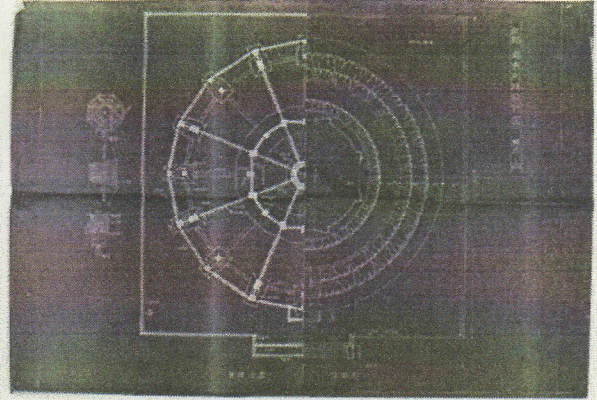
釧路仏舎利塔（北海道釧路市 昭和34年8月22日落慶）

大岡が初めて設計を依頼された仏舎利塔は釧路仏舎利塔である。設計依頼は昭和23年頃で、最初は大岡は断ったのだが、他に適任者もおらず、「勉強しながらでよければ」という条件で引き受ける事になった。

設計案ではドーム部分と基壇に蓮弁があるが、これは実施には至らなかった。



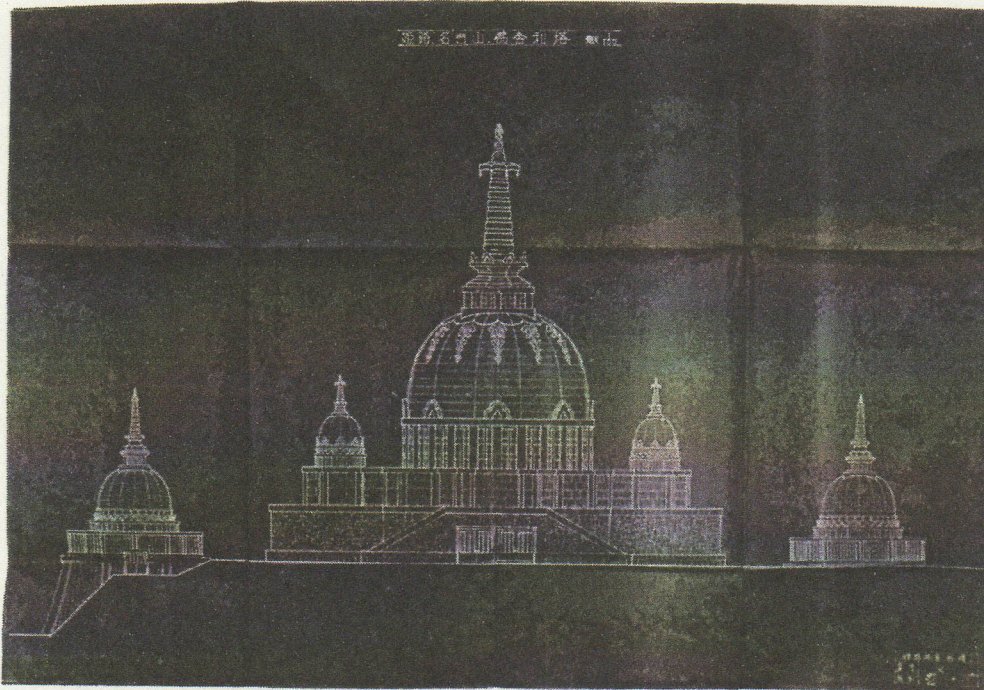
釧路仏舎利塔設計図 正面図



釧路仏舎利塔設計図 平面図・基礎伏図

姫路市名古山^{なごやま}霊園仏舎利塔（兵庫県姫路市 昭和35年4月8日落慶）

次に大岡が設計したのが姫路仏舎利塔で、これは大岡が設計した仏舎利塔中最大規模の物である。但し、他の仏舎利塔が日本山の信者からの寄進を資金とし、出家者自らが施工したのに対し、これは姫路市の依頼により市立名古山霊園に建てられた物なので、正確に言えば日本山妙法寺が建てた物ではない。



姫路名古山佛舎利塔立面図 1/100

仏舎利塔の全景が分かる資料

日本の寺院の五重塔や三重塔も仏舎利塔の一種だが、日本山妙法寺が建てたのはインド風のストゥーパである。教主の藤井日達氏がインド等から招来した仏舎利を日本各地に奉納する事を目的として建てられた。

このインド風のストゥーパを設計するために、大岡は現地インドのストゥーパの研究を開始した。以下はその研究成果を集大成した大岡実『仏舎利塔の由来とその変遷』（日本山妙法寺田子の浦道場 昭和56年4月）による。

屋外にある現存最古のストゥーパはインド中部のサンチにある3基のストゥーパである。最初アショカ王時代に煉瓦でストゥーパが造られ、それを紀元前2世紀頃に野石積みで拡大したものとされている。現在は石造の基壇・ドーム・欄楯（手摺のこと）が残るが、残念ながら平頭（ドーム上部の四角い部分）より上は20世紀になってからの復元で、この部分の当初形式がわからない。

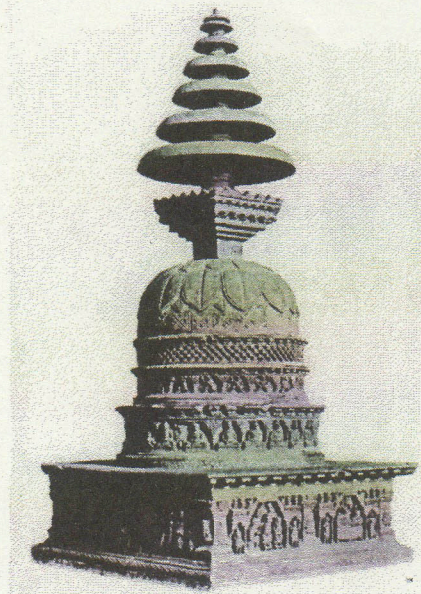
ストゥーパの全景が分かる資料には石窟寺院内のストゥーパがあるが、これは規模が小さいため細部の手法が簡略化されている。

そのため、全景が分かる資料としては次の物があるだけである。

1・スワット渓谷出土の小塔（2世紀）

かつてのガンダーラ地方、現パキスタンのスワット渓谷から出土した小塔がカルカッタ博物館に展示されている。2世紀頃の物と推定されている。基壇と相輪が大きくなり、その分ストゥーパ本来のドーム部分が小さくなっている。しかし、これは一つの石から彫り出した物なので、比較的早い時期のストゥーパの全体を知りうる立体的な資料としては唯一の物である。

大岡はインドの王舎城仏舎利塔〔S44. 10. 25 落慶〕はこれを元にして設計したと述べている。しかし各部のバランスやドーム部分の曲線は全く変えており、更に相輪の頂上には日本風の水煙が乗っている。



スワット渓谷出土のストゥーパ



王舎城仏舎利塔

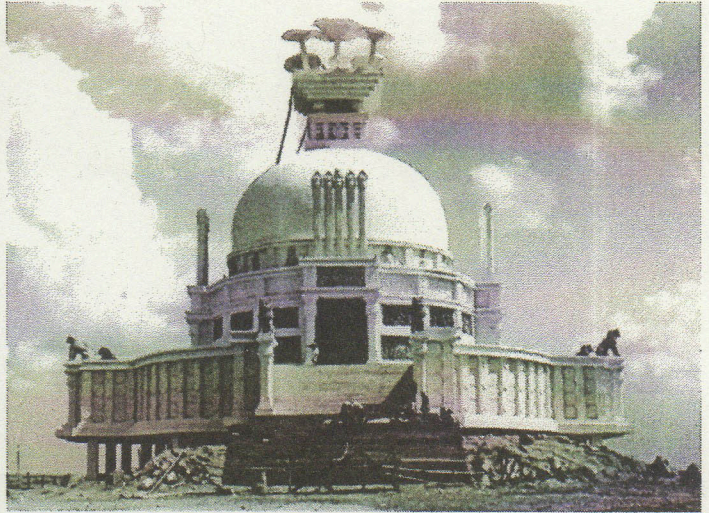
2・アマラーヴァティー出土のレリーフ (2世紀)

インド南部、マドラスの北約 300km のアマラーヴァティーにはかつて基壇直径 50m の大ストゥーパがあった。紀元前 2~1 世紀に創建され、紀元後 2 世紀に大増築した。現存はしないが、この増築後の姿を彫ったとみられるレリーフが出土している。塔の細部まで詳細に知る事が出来、中でも塔の四方に「アーヤカ柱」と呼ばれる五本の柱が立っているのが特徴。

インドのオリッサ州ブバネシュワールに建設されたダウリ仏舎利塔 [S47. 11. 8 落慶] は、所在が近い事もあり、このレリーフを元に設計された。



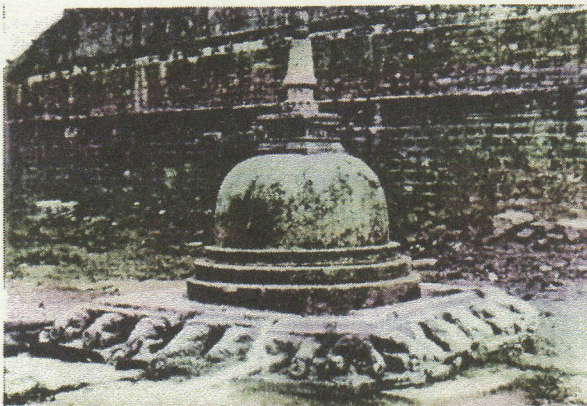
アマラーヴァティ出土のレリーフ



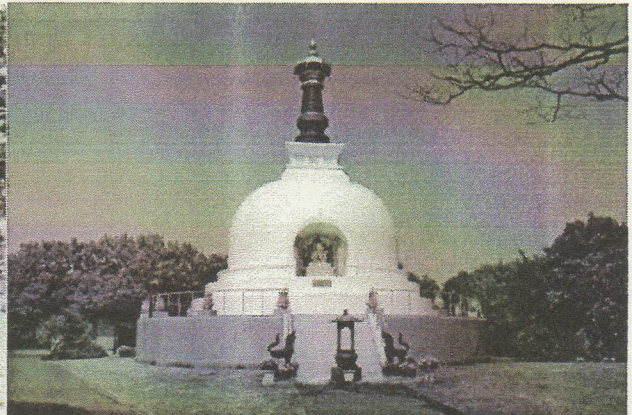
ダウリ仏舎利塔

3・スリランカ、アヌダプラーの大ストゥーパの基壇上の小ストゥーパ (2世紀)

上記の 2 基のストゥーパはインドに建設されたため、何とかインド国内の資料を参考にして設計された。しかし他の大岡設計の多くの仏舎利塔は、スリランカのアヌダプラー大ストゥーパの基壇上にある小ストゥーパが基準となった。これは基壇から平頭まで一石で出来ていて、相輪は別石らしいが同質の石なので同時の工作に間違い無い。全体のバランスやドーム部分の肩の曲線などが良く整っている。



アヌダプラーの小ストゥーパ



多摩仏舎利塔 (東京都稲城市)

建築史という学問の目的の一つは、新しく設計する際の指針を得る事であった。大岡のインド建築研究は、この建築史の原点にたち帰った物と言えるかも知れない。

川崎大師自動車祈祷殿（川崎市川崎区大師町 昭和 45 年 11 月 22 日竣工）

大岡は上記の一連の仏舎利塔の設計のためにインド建築の研究をする事になったが、その成果は仏舎利塔だけでなく寺院の設計にも生かされる事になった。

まず各地の日本山妙法寺の本堂がインド様式で設計された。千葉県清澄山本堂・稲城市多摩本堂〔S56. 4. 25〕・熊本県天草本堂など。これは、隣にインド風の仏舎利塔が建っているのも、ある意味では必然である。

そして日本山妙法寺以外の寺院にもインド風の設計が採用された。新潟県魚沼市の龍谷寺観音堂〔S40. 4. 24 竣工〕と、川崎大師自動車祈祷殿である。

大岡実「川崎大師の諸建築」（『有鄰 121 号』昭和 52 年 12 月）

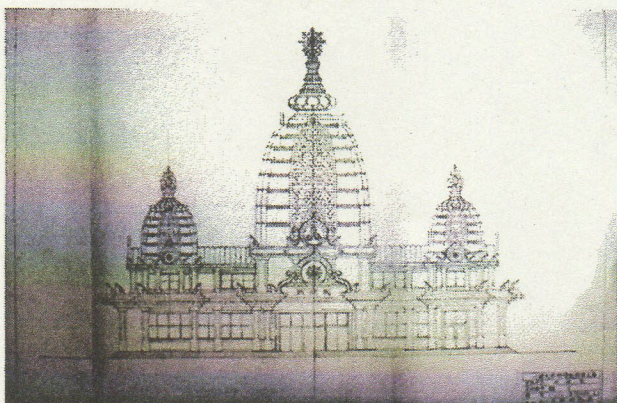
約一〇年後、自動車の祈祷殿の設計の依頼があり、何か変わった建築をとのことであった。丁度私は、日本各地及びインドで仏舎利塔（釈迦の遺骨を納める施設）の設計のためインド建築を研究していたので、インド風の設計をした。本堂などと全く違った様式で、全体としての違和感が心配されたが寺域の南側で、本坊にさえぎられて本堂前の伽藍中心部からはほとんど見えないのでこの形式に踏み切った。主としてヒンドゥ教式の建築で砲弾状の高塔を三本建てた。総延坪二一九坪で純インド風であり、日本では異色な建築であろう。

宇賀神信一「川崎大師の復興と共に」（『建築画報 第 96 号』昭和 50 年 6 月）

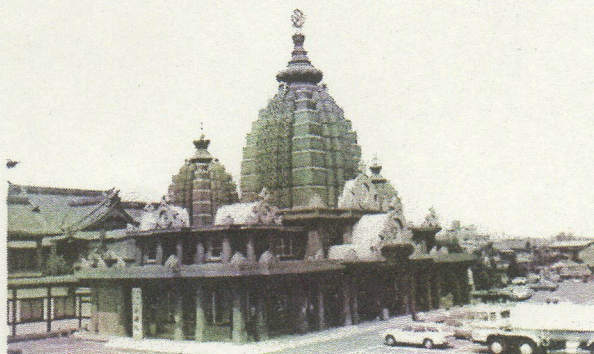
大岡先生御設計の新祈祷殿は、印度風の三塔を屋上に飾って、打放しにセラスキン吹付の難工事でした。設計の松浦先生、彫刻の斎藤高德先生の御指導のもと、現寸大粘土原型から石膏型をとりコンクリートブロックに置き替える工法で妻飾りは勿論、塔頂部のブロックから転法輪のアルキャスト石膏型まで現場で製作しました。

戦後の川崎大師の復興は全て大林組の施工で行われた。宇賀神氏はその大林組川崎大師工事事務所長。松浦弘二氏は大岡が主宰した大岡實建築研究所の所員で、大岡が設計した殆どの建物の実施設計を行った。現在は弘二氏のご子息の松浦芳夫・清・隆の三氏が大岡實建築研究所を引き継いでいる。

川崎大師自動車祈祷殿は鉄骨鉄筋コンクリート造で、上記にあるとおり、塔部分の表面に砂岩調の吹付けを施している。姫路仏舎利塔と似た仕上げで、恐らく石造の雰囲気を出そうとしたものと思われる。



川崎大師祈祷殿新築工事正面図〔S44. 6〕



サンフランシスコ平和塔案

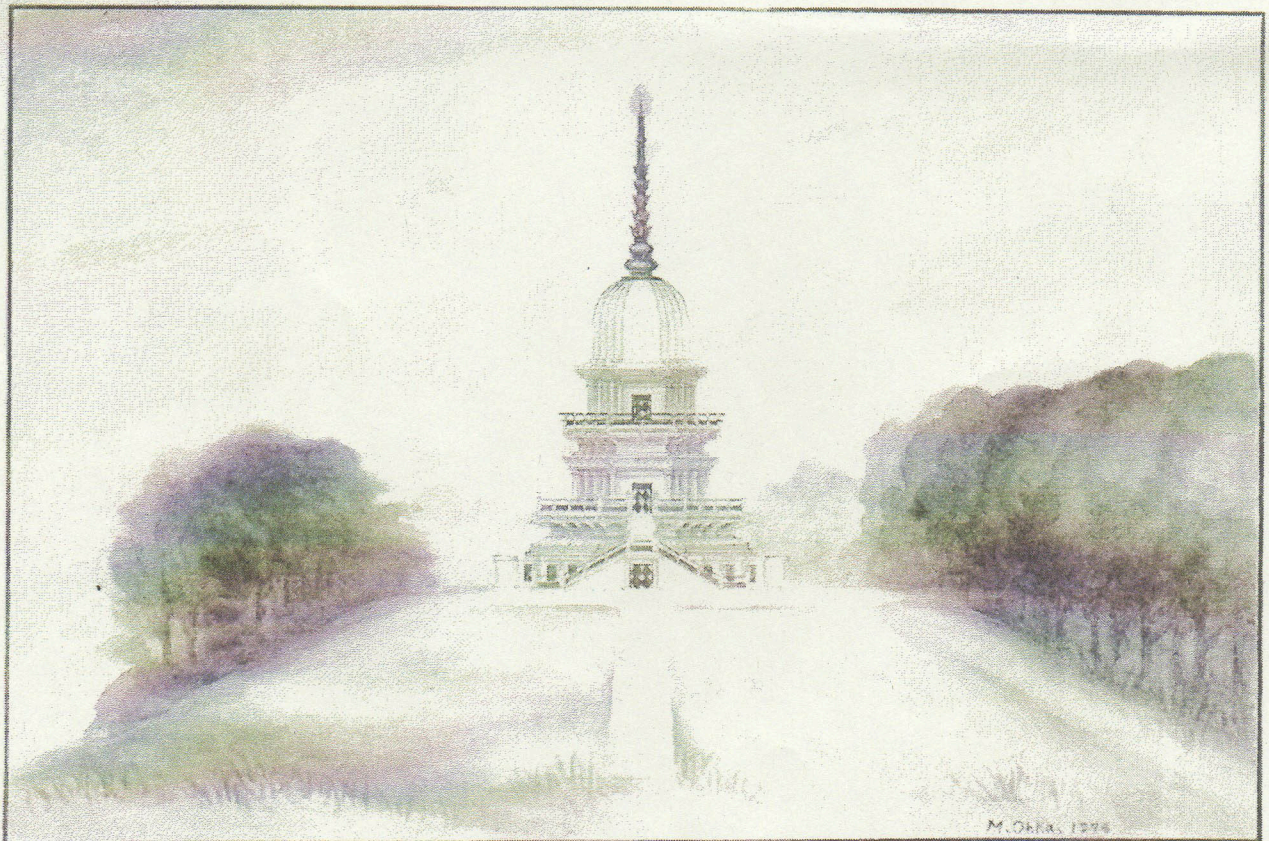
日本山妙法寺は日本国内だけでなく世界各地に仏舎利塔を建設している。上記のインドの他に、イギリスに2基、ウィーンに1基、大岡實設計の仏舎利塔がある。そして大岡實が関与した中で最も特異な物として、サンフランシスコ平和塔がある。

これは日本山妙法寺が計画した物だが、他の仏舎利塔と異なり、アメリカ建国100周年の時にフランスがニューヨークに自由の女神を贈ったのに対抗し、建国200周年を祝して西側の玄関口であるサンフランシスコに記念塔を建てようとした物である。実際にサンフランシスコの市長や市議会からの承認を得て、敷地や施工業者も決まっていたが、実現には至らなかった。もし完成していれば大岡實の代表作の一つになっていたと思われる。

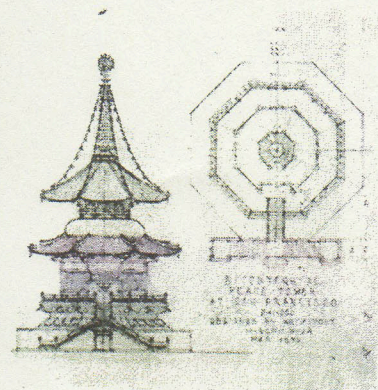
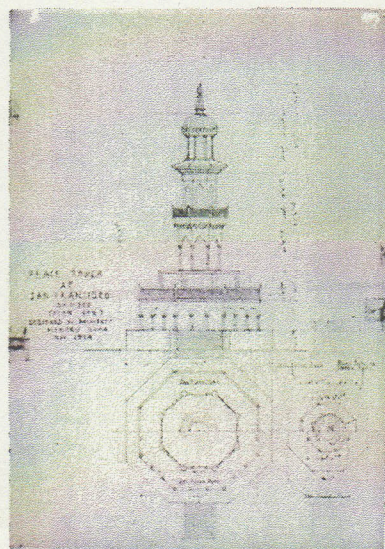
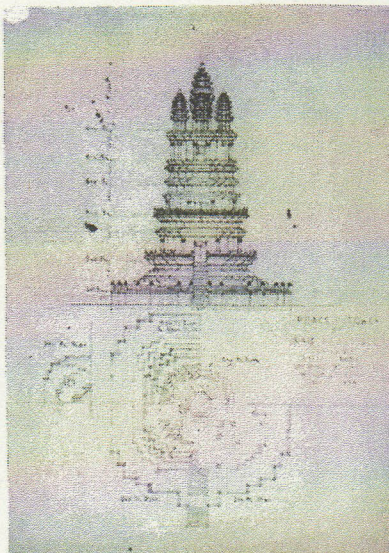
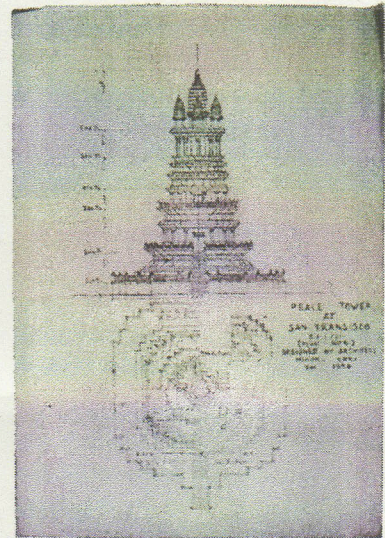
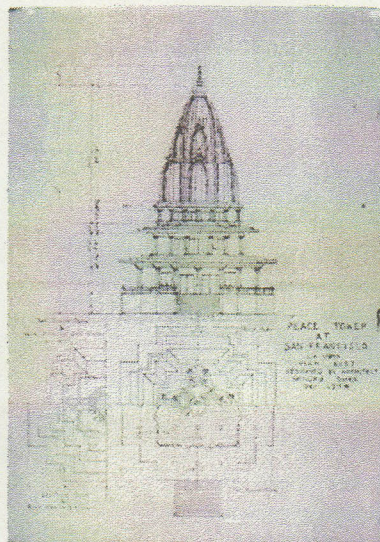
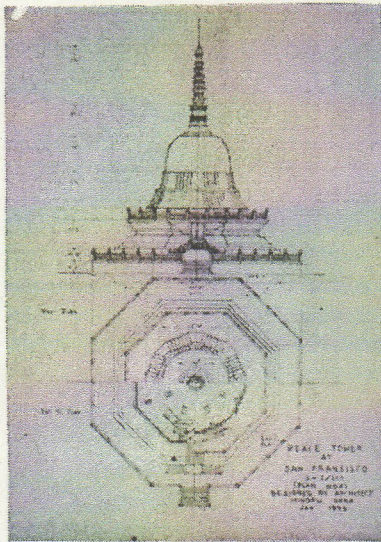
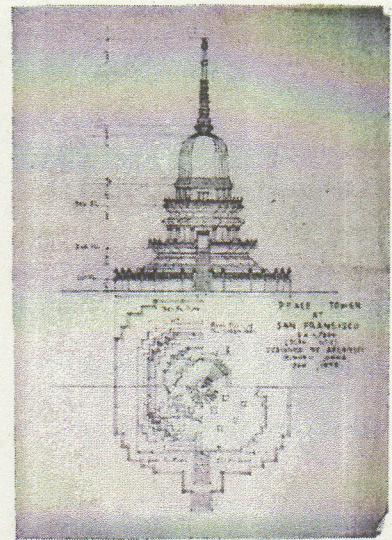
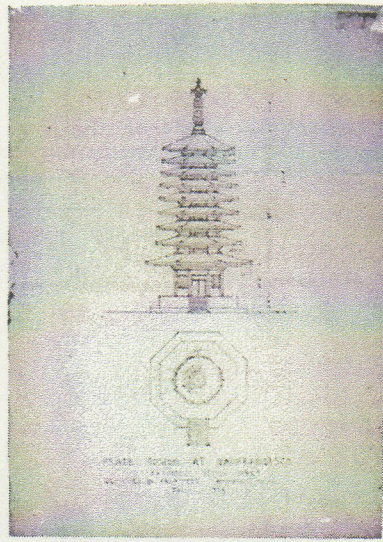
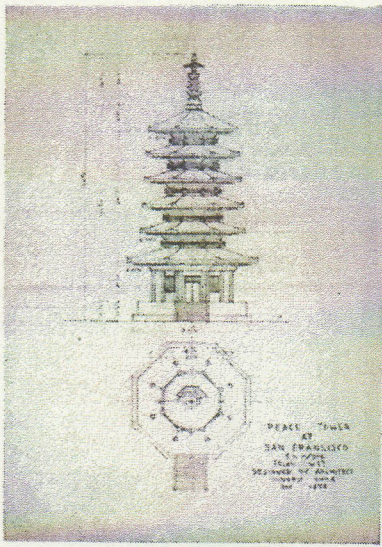
大岡実「サンフランシスコ平和塔の設計について」(大岡資料 4-3-11-125)

最初は日本が創るのであるから、日本的なものをもと一、二、図面を書いてみたが、日本における塔の建築と言え、寺院の三重塔や五重塔位のもので形が限定され、アメリカの都市に建てたのでは、周囲と余りにも掛け離れて、調和しないのではないかと思ったので東洋各地のものを参考にして数種設計して見たが、最後にこれ等を離れて、とにかく monumental で姿の美しい塔をと思って設計したのが、この案である。

上記にある様にこの決定案は、古建築の細部を借りながらも、全体としては大岡實独自の様式を持った物であった。



サンフランシスコ平和塔立面図 [S51]



「PEACE TOWER AT SAN FRANCISCO PLAN No. 1 1/200」～「同 No. 8」

「BICENTENNIAL PEACE TOWER AT SAN FRANCISCO 1/200」(部分)

参考文献：山田なつみ『建築史家大岡實の新築社寺設計 今日のコクリート社寺建築について』横浜国立大学 2005 年度修士論文

青柳憲昌・安田徹也共編『建築史家・大岡實の建築』川崎市立日本民家園 2013 年